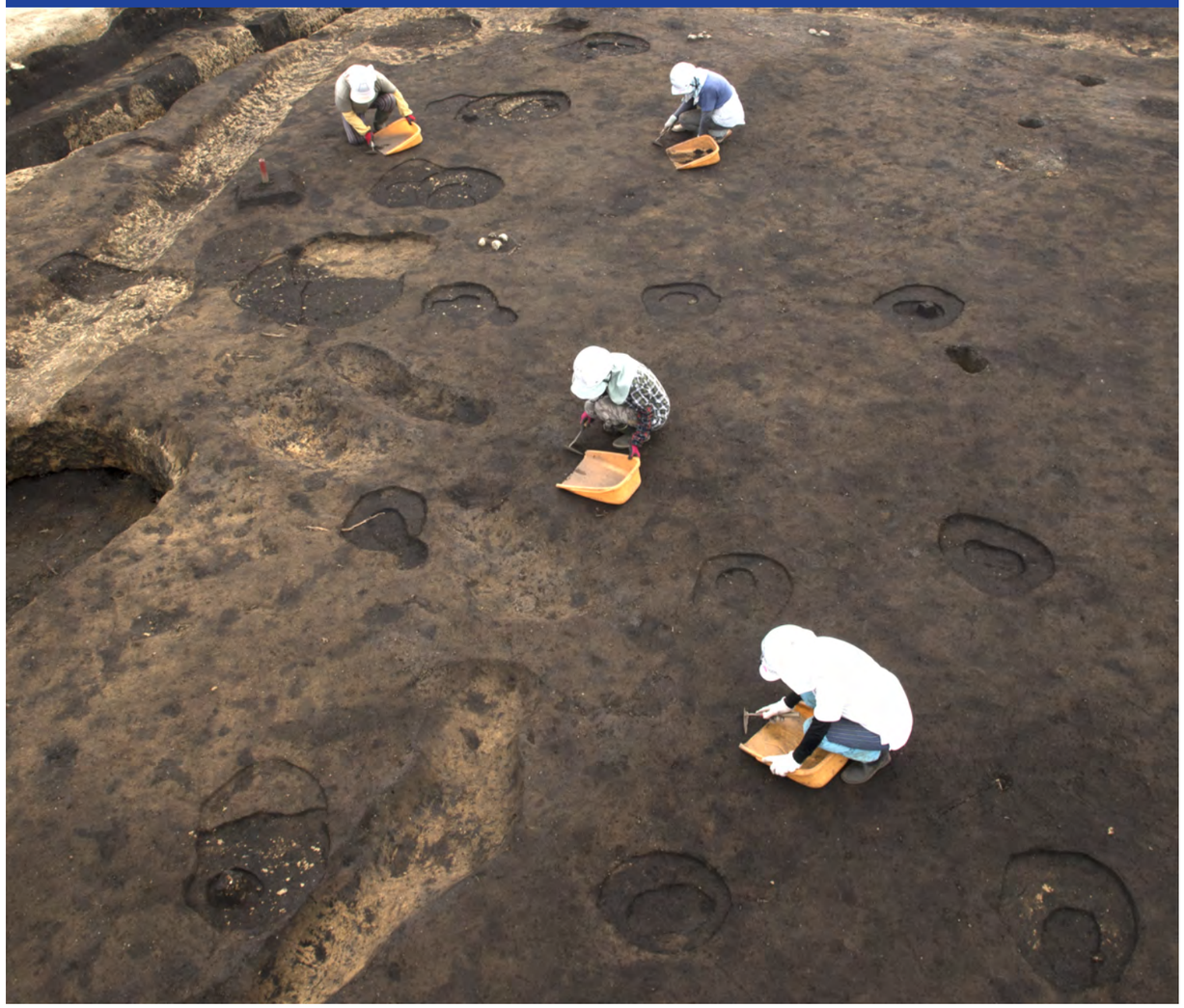
平成 29 年度

平成 29 年 10 月7日（土）

小鴨道祖神遺跡現地説明会資料

公益財団法人鳥取県教育文化財団



掘立柱建物 7・11 のみつかったようす（北から）

小鴨道祖神遺跡とは・・・

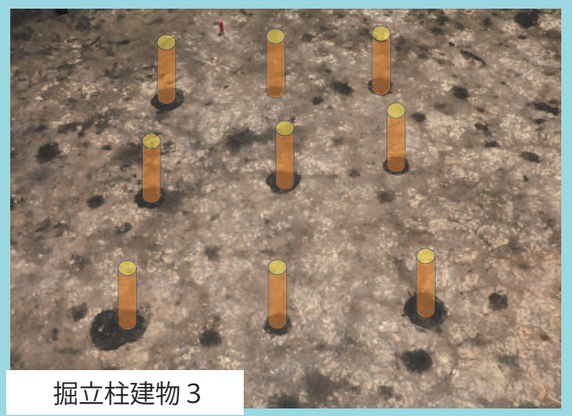
小鴨道祖神遺跡は、伯耆国庁跡の南東に広がる「天神野丘陵」に位置する集落遺跡で、当財団の行った平成 29 年度の調査では、奈良時代のものを中心とする遺構・遺物がみつかりました。このたび確認された掘立柱建物 12 棟以上、竪穴建物 1 棟は、これまでおこなわれた周辺遺跡の調査成果とあわせて、天神野丘陵の広い範囲に奈良時代の集落が営まれていたことをあきらかにするものであり、倉吉に国庁が置かれたころの人々の生活を知るうえで重要な発見となりました。

側柱建物と総柱建物

本遺跡で確認された掘立柱建物には、「側柱建物」と「総柱建物」があり（下写真参照）、建物の方角が同じものがあることから、集落の中ではこの２種類の建物が同時に存在していたと考えられます。本遺跡では、側柱建物の方が床面積が大きく、総柱建物はすべて２間 ×２間（９本柱）の小さいものであることが特徴的で、なんらかの使い分けがあったようです。

掘立柱建物 12

側柱建物…建物の外壁に沿って柱を立て、上屋を支える構造です。



掘立柱建物 3

総柱建物…建物の外側だけでなく内側にも柱をたて建物を支える構造です。

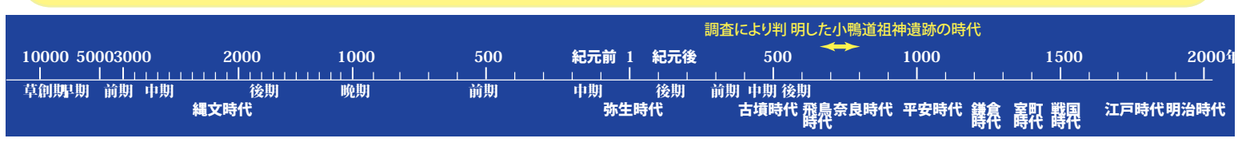
馬に託した祈り～土馬～

本遺跡からは、「土馬」とよばれる馬をかたどった土製品が多数出土しています。土馬は古代の祭祀（まじない）に使用した道具であり、ほとんどの場合、意図的に壊された状態で見つかります。

土馬を壊すのは、雨乞いのためのいけにえの代わりとも、馬にのってやってくる疫神（災いをもたらす神）を来れなくするためともいわれています。

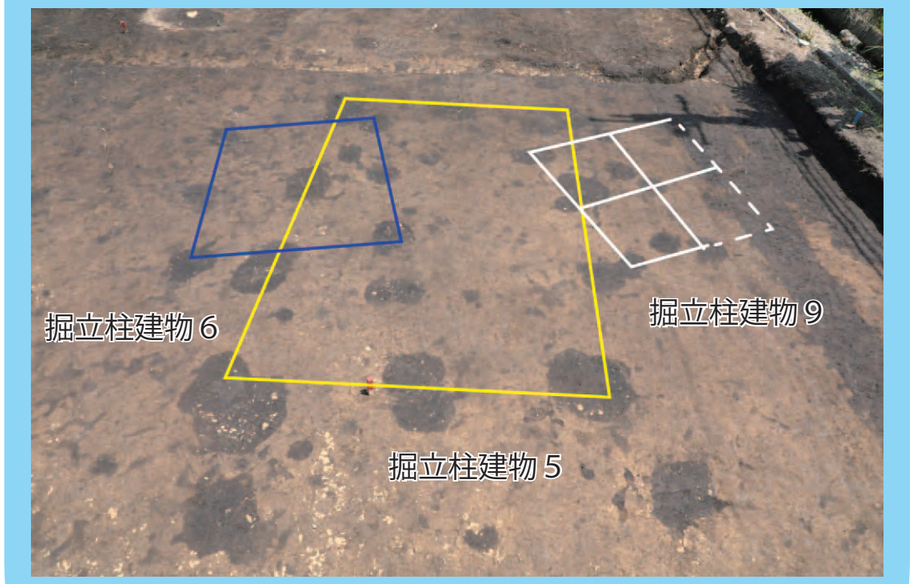
小鴨道祖神遺跡に集落を営んだ人々はどのような願いで、土馬を壊したのでのでしょうか？

本遺跡の土馬もすべて破損した状態でみつかっています。鞍をつけたものと、それがない裸馬があります。



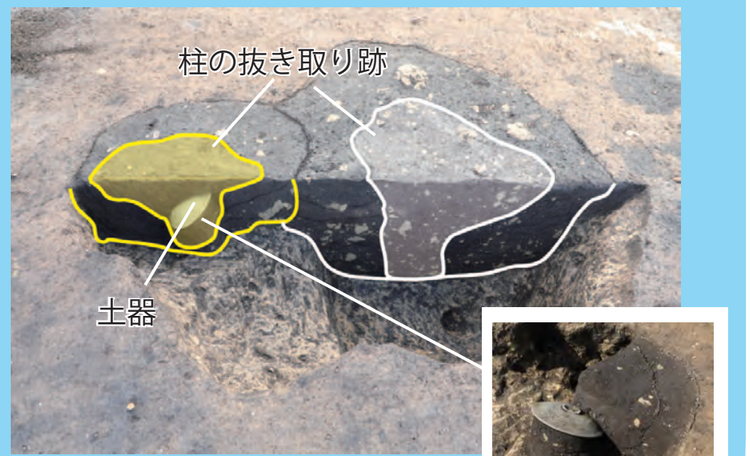
平成 29 年度小鴨道祖神遺跡現地説明会資料　〒680-1133　鳥取市源太 12 番地　TEL:0857-51-7553　FAX:0857-51-7550
発行：公益財団法人 鳥取県教育文化財団調査室　HP:http://kyo-bun.sakura.ne.jp/chosasitsu%20new.htm

さかんに行われた建て替え工事



みつかった掘立柱建物には、他のものと位置が重なっていたり、柱穴が堀り直されているものが多くあり、何度も建物が建て替えられていたことが分かりました。上写真の３棟の掘立柱建物は、柱穴の前後関係から、大きな規模の掘立柱建物５が取りこわされたのち、小さい掘立柱建物６・９が建てられたことが分かりました。

また、掘立柱建物５は、少なくとも１回、同じ規模で建て替えられたことが確認され、最終的な建物の取り壊しに伴って、地鎮のような祭祀（まじない）が行われたことが確認できました（下写真）。さかんに行われた建物の建て替えによって、集落のすがたは少しずつ変化していきました。



新しい段階の柱を抜き取った後に、土器を治めていることが分かります。

忽然と現れ消えた集落

今回見つかった集落は、出土遺物から、飛鳥～奈良時代のものにほぼ限られており、短期間に営まれたことを示しています。

遺構名	規模 桁行 間(m)	規模 梁行 間(m)	面積(㎡)	主軸
掘立柱建物1	3(5.0)	3(4.0)	20.0	N-27°-E
掘立柱建物2	3(4.6)	2(3.0)	13.8	N-21°-E
掘立柱建物3	2(3.3)	2(2.7)	8.9	N-22°-E
掘立柱建物4	2(3.8)	2(3.1)	11.8	N-20°-E
掘立柱建物5	3(5.8)	2(3.8)	22.0	N-35°-E
掘立柱建物6	2(3.0)	1(2.5)	7.5	N-28°-E
掘立柱建物7	3(5.8)	2(4.5)	26.1	N-31°-E
掘立柱建物8	2(4.0)	1(3.2)	12.8	N-22°-E
掘立柱建物9	2(2.6)	2(2.6)	6.8	N-14°-E
掘立柱建物10	2(4.8)	2(3.3)以上	15.8以上	N-42°-E
掘立柱建物11	2(4.8)	2(3.8)	18.2	N-16°-E
掘立柱建物12	3(6.3)	2(5.0)以上	31.5以上	N-29°-E

掘立柱建物の規模

竪穴建物

中央のピット底面は熱を受けたことにより赤く変色しています。

１辺３ｍの正方形の平面形をしており、古代の小尺（30㎝弱）を用いて設計された可能性が考えられます。弥生時代の竪穴建物のように深く堀りこまれてはおらず、明確な柱穴はみつかっていません。ただし、中央には火をたく炉と考えられる穴があり、その周りは人に踏みしめられたことによって特に硬くなっています。煮炊きをしながら家族で炉を囲んでいたのでしょう。また、水はけをよくするため、壁際には溝がめぐらせてあり、建物の中で過ごしやすくする工夫をしていたことがわかります。